

今週の本棚

大竹 文雄 評

人びとのための資本主義

ルイジ・ジンガレス著 (NTT出版・2730円)

大きな政府に反対するティーパー
ティ運動や10の富裕層に反対す
るオキュパイ(ウォール街を占拠せ
よ)運動という左右両極に見える米
国の大衆運動には共通の原因がある
と著者は言う。それは、金融界の富
裕層が金融危機に加担しておきなが
らその対価を払わなかったどころか
公的資金で救済されたことだ。著者
も大衆運動を行う者と同様の怒りと
恐れを感じている。著者が怒ってい
るのは「自由市場の概念がほとんど
ビジネスの既得権に支配され、アメ
リカの民主主義の均衡が根本から変

わっているから」である。恐れてい
るのは、「怒りを覚えたアメリカ人
が、現在あるアメリカの資本主義を
やめてしまふ道を選ぶことだ」。

と著者は考えた。イタリアでは大学
教授のもとで靴持ちをすることが
必要だった。米国大学院ではそうで
はない。縁故に頼ることなくキャリ
アを築くことができた米国がイタリ
アのようなコネ社会になってしまふ
ことに耐えられないのだ。

であること、ロビー活動をどうやっ
て制限するか、税金のあり方、デー
タを公表することの重要性など、具
体的な処方箋が述べられる。

本書の第一部では、「所有権の尊
重と契約の不可侵性、自由市場経済
への信頼」というアメリカの資本主
義が世界的にも例外的に形成されて
きたにもかかわらず、巨大すぎて潰
せないという理由で、救済されてい
った銀行、それを防ぐことができな

資本主義に批判的な人は、競争的
な市場を嫌うという場合と、労働者
ではなく企業に有利である点を嫌う
場合がある。逆に言えば、資本主義
を支持する人には、競争的な市場を
重視する市場派と企業の利益を重視
する企業派とが存在するということ
だ。多くの人は、この両者を同一視
している。しかし、既存企業の既得
権を重視する企業派と、新規参入を

既得権に抗する「市場派」からの処方箋

著者がここまで市場派資本主義が
浸食されていくことに怒っているの
はなぜだろうか。それは、単に著者
が経済学者だという理由だけではな
い。著者はイタリア出身のシカゴ大
の経済学教授である。イタリアの大
学在学中に経済学の研究者になろう

かった専門家について詳しく述べら
れていく。第二部で、市場を重視し
ながら問題を解決する手法を提示す
る。機会均等にするための教育政策
のあり方、競争を用いることで不平
等をどうやって解決するか、市場を
うまく機能させるために倫理が重要

促進することで競争を活性化するこ
とを重視する市場派とは、対立する
ことも多い。ところが、米国以外の
多くの国では、歴史的な事情で市場
派と企業派が手を組まざるをえない
ことが多かった。例外的に米国では
市場派が優勢であり、それが米国の

資本主義の良さである。しかも、現
在も多くの米国人は市場派を支持し
ている。著者によれば、市場派の資
本主義とは、企業のためではなく人
びとのための資本主義ということ
だ。市場競争によってメリットを受
けるのは、競争をしている企業では
なく、競争市場で提供される商品や
サービスを購入する消費者なのだ。

著者は自分たち専門家も批判す
る。専門的知識をもったものは、そ
の知識が専門的であればあるほど、
その分野の既存企業の成功に既得権
をもってしまつたため、市場派と乖離
するだけでなく、専門家と業績主義
に対する国民の不信感をもたらし
てしまつたのだ。この問題への対処法は、
専門家を排除するのではなく、専門
家間の競争を盛んにし、データを公
開することだと著者は言う。

本書は、市場不信が高く、原発事
故で専門家不信が高まった日本社会
を改善していくヒントに満ちてい
る。(若田部昌澄監訳・栗原百代訳)